

## 学界展望

### イギリスにおける都市経済史研究

—R. A. チャーチ博士の近業を中心に—

武 居 良 明

イギリスの大学で、ユニヴァーシティ・キャンパスということばが素直に適用できる大学はそう多くはないが、セリィ・オーク街のはずれの丘陵に全学を集中するバーミンガム大学は、このことばをそっくり適用できる大学の一つである。史学系校舎、中央図書館、都市問題研究施設、の三棟の堂々たる大建築によって三方を囲まれた、幾何学模様を思わせる美しい中庭には、程よい陽ざしを浴びようとする男女学生たちが点々と散らばって寝ころんでいた。7月の初旬（1966年）だったと記憶している。R. H. ヒルトン教授の案内で構内を巡回していく途中、この中庭を通りぬけて、一段低くなったところにある大学の売店をのぞいてみた。売店とはいえ、堂々とした建物、あかぬけした内装は、ちょっとしたデパートを思わせる。書籍部が特に充実している、と同教授が説明してくれたが、広々とした面積で、しかも地下、中二階と三層にわたった売場を占める書籍部は、先進国の、しかも「学」問のうえに「大」の字がつく研究・教育機関のそれにふさわしいとつくづく思いしらされた。日本をたつ直前、わたくしの所属する信州大学でも生活協同組合設立のはなしがもちあがっている時ただただに、豊かさとはこんなものかといささかゆうつでさえあった。

わたくしがここで紹介しようとする R. A. チャーチ博士の『ミッドランドの一都市における経済・社会的変動』<sup>(1)</sup>にはじめて接したのは、この書籍部で「いささかゆうつ」になっている時のことであった。多分、教科書として使用されたのであろう、一階中央の陳列台のうえに、うず高く積み重ねられていた。

さて、本書の内容紹介にさきだって、イギリスにおける都市史研究のなかで、本書がいったいいかなる位置づけをされるべきか、といった点にふれておこう。

イギリスにおいて農業史研究と農村史研究がほぼ手をたずさえて進められてきたのにたいし、商工業史研究とその立地である都市史研究との関係となると、そのかんに大きなひらきがあることはいなめない。これはどうやら世界的な傾向であるらしい。そうしたなかであって、イギリスでは、レスター大学の H. J. ディオス博士、マンチェスター大学の W. H. チョロナー博士、グラスゴウ大学の S. G. チェックランド教授らが中心となって「都市史研究者集団」Urban History Group を数年前に発足させ<sup>(2)</sup>、300名をこえる——1967年7月現在——会員の熱心な交流をつうじて、こうした落差を埋めようとの努力が払われている。わたくしも滞英中にその会員となり、帰国後も国際学術交流のささやかな窓口たらんと連絡を保ちつづけているが——The Study of Urban History in Japan なるわたくしの小論文が1967年に同集団の機関誌に発表された——、この学会の活動については改めて別の機会に紹介したいと考えている<sup>(3)</sup>。ところで、この機関誌ならびに当学会の手になる諸資料によってみる限り、都市史学ないし都市発達史研究なる学問分野が、近来にわかに脚光をあ

びている都市化（urbanization）研究と別個になりたちうる国々には、どうやら先進国に限定されるようである。英連邦内の大学に点在する数少ない会員がよせた、それらの国々にての研究状況の紹介によれば、紹介のペンをとっている当人はそれぞれの国の都市史研究状況を紹介しているつもりであっても、イギリスのそれを基準にして考える限り、都市史というよりも、いわゆる都市化研究ないし都市問題研究である場合が多い。つまり、古代都市史、中世都市史、の研究とは別個に、産業革命前後の近代都市史研究が独立した研究分野としてなりたちうる地域は、ヨーロッパそのなかでも、厳密な意味ではイギリスだけに限られるのではなかろうか、とさえ思われるのである。こうした意味での、イギリスに固有な近世都市史研究は、当然予想されるように、個別都市についての地域研究という形をとっている。そして、それはさらに次の三つのグループに分類することができるようである。第一グループは、チョロナー博士のクルーにかんする研究<sup>(4)</sup>、ここに紹介せんとするチャーチ博士の研究などにより代表されるような、社会・経済史的研究、第二グループは W. K. ハント氏<sup>(5)</sup>によるリヴァプール、G. W. A. ブッシュ博士<sup>(6)</sup>によるブリストル、のそれぞれの研究により代表されるような、近代地方自治確立史研究、第三グループとして、上記二種の研究をもふくめて一般に地域研究を進めていく場合、イギリスで常に、一つの礎石とされる地理学的ないし地誌的研究をあげることができる。第三のグループは、それぞれの地域の大学に籍をおく専門の学者からなかばアマチュア的な層まできわめて幅広く、各州にくまなく組織されている、かの「古史研究会」Archaeological Society の「学風」とでもいうべきものに属する。事実、このグループに属する人びとの多くは、それぞれの地域の古史研究会会員であり、かれらの研究成果は、大学に籍をおく専門家のそれと互して、それぞれの古史研究会機関誌——年報の形式をとるものが多い——に発表され、興隆途上にある都市史研究の一支柱となっているのである。これにたいし、第一、第二のグループは純粹のアカデミズムに属し、第一グループは経済史の、第二グループは政治史の、視角からする都市史研究である。ところで、ひとしく第一グループに属する研究といっても、「経済・社会史」のうちのいずれに力点をおくかによってかなりその内容が異ってくるが、そうした差異の多くは対象にえられた都市自体の性格に由来するように思われる。例としてうえに掲げた二著は、いずれも産業革命期以来工業立地として脚光をあびてきた都市を対象としており、そうした点からも、産業革命期より今世紀初頭にかけての、ヴィヴィットな経済史研究としての面が強くうちだされている。

さて、本書が扱う約一世紀間——1815～1900年——のうち最初の数十年間は、旧生産様式を墨守する小経営、「マニュファクチュア経営」、そして最後に工場制と三種の経営形態が複雑にからみあい、そのうえにさらに工場制下の労働者、地主、借地農、それぞれの利害も加わって、イギリスの経済＝政治情況が空前の混乱を露呈した時期である。そうした混乱状態は、まず、ランカシャー綿工業部門で<sup>(7)</sup>、次いでミッドランドの靴下編工業部門で<sup>(8)</sup>くりひろげられた。本書は、副題の示すように、ミッドランド靴下編工業三都市のうちの一つ、ノティンガムを対象にえらび、産業構造の転換とノティンガム市政の近代化との関連を追求する。そのさい、一方、靴下手編工業をもって古い伝統的な産業を代表させ、他方、レース編工業をもって新しい組織にもとづく産業を代表させ、両者の確執抗争→後者による前者の圧倒のうちに都市自治体の近代的脱皮をよみとろうとする。レース編工業へ機械の導入され

た1810年頃を起点として、両工業間の落差はいっそう拡大していく。すなわち、靴下手編工業は10年代以降「景気変動と失業」による打撃をうけ、衰退の一途をたどっていくが、レース編工業の方は「急速な拡張」と繁栄とを特徴としていた。

以上、全篇を貫ぬく論点を提示した後、第二章において靴下手編工業の産業組織を分析する。当該工業の「産業組織にみられる重要な特徴は外業 outwork [=前貸制]にあった」。つまり、稀には独立小経営もあったが、その多くは都市に住む「靴下向編糸前貸人」hosier——仕上業者兼商人——、ないし地方在住の「仲買人」middleman の配下で、編糸の供給をうけてこれを加工する小生産者、換言すれば問屋の外業部としての営みであった。また、該工業においては、綿手織業の場合と異なり、編機は前貸人ないし仲買人が生産者へ賃貸する——賃機制度——という形式をとっていた。そのため、生産者自から織機を所有した綿手織業に比して工場制への移行が容易であったこともうなずけよう。ところで、これら編工の工賃は、レース編工の約半分という低さで、しかもこうした鉄状差は時の経過と共に拡大する一方であった。にもかかわらず、工賃値上げのための団結は、その分散的経営形態のゆえに困難をきわめ、しかも、一たん結成された組織も「一時的」なものにすぎなかった<sup>9)</sup>。他方、前貸人層はどうか。これは第十章の課題となる。前貸人の生存をおびやかす新事態は、ほぼ19世紀中葉にはじまった当該部門への工場制導入である。工場制はまず粗悪品製造分野をおそった。当該分野にかなするかぎり、工場制が一般的経営形態となり、零細な小経営ないしマニュファクチュア経営もこれとの競争を余儀なくされ、前二者は次第に脱落していく。「仕事場」workshop にたいしてもひとしく、そして無慈悲に適用された工場法はこの傾向に加速した。かくて19世紀末期までに靴下編工業は完全に消滅してしまう。この過程は同時に、こうした零細経営を問屋制的に支配する小規模前貸人の敗北の過程でもある。同世紀のなかばより、工場主へと上昇しつつあった大規模前貸人と、自衛のために手段をえらばぬ小規模前貸人とのあいだで激しい生存競争が展開される。この渦巻く乱斗をわたくしの手で整理してみると、こういうことになる。まず、大規模前貸人は小規模前貸人を圧迫し、後者はそのしわを零細編工に転化する。つまり、編工の労働力再生産費をすら無視した工賃圧下である。そこで小規模前貸人は、自己の配下の編工、労働力の再生産費を考慮する大規模前貸人の双方よりする非難の矢面にたたされる。こうした状況は、19世紀初期綿手編業における大規模前貸人（紡績工場主）、小規模前貸人、手織工、三者の関係と全く規を一にしている。

次に、レース編工業をめぐる敘述に眼を転ずることにしよう。これは、第3、4章および第11章で扱われる。レース編工業は、海外からの競争、ないし、パキンガムシャーの伝統的なレース手編業によって妨げられることもなく順調な上昇をつづけていく。1823～5年には、レース編工たちは週5～10ポンドの工賃を稼ぐといったはぶりのよさであり、その多くは富裕なレース製造業者へと一直線に上昇していく。これらレース製造業者は、既述の、靴下製造業者=工場主——大規模前貸人より径あがったもの——と一体となってノティンガム市の指導者層を形成する。Vicker, Cullen, Thackeray, Reckess, Mundellas, Oldknow といった当市の名門はいずれも、上述のようにして上昇をつづけていった家系であった。ノティンガム市は、19世紀末までに、教会建設、公衆衛生施設の諸改善、礼拝堂および教育施設をも備えたモデル工場の建設、「技術者教育機関」Mechanics Institute の開設、大学設立、等の近代都市にふさわしい諸事業を次々とやりとげたが、これらはすべて上

記の名門ないしそれと同類の指導者層によつて果されたのであった。

このように、産業革命を劃期として旧特権都市における新旧支配者層のあいだで交替が認められるということ、これは決してノティンガムに限っての現象ではなく、イギリスの旧特権都市のすべてに共通しており、それを集大成したものが1835年の「都市改革法」Municipal Corporations Act にほかならない。わが国のイギリス経済史学界では、産業革命史研究にさいし、こうした問題の追求はほとんどおこなわれていないが、いうならば、産業革命は都市改革をまっしてはじめて完結するのであり、イギリスの近代経済史家たちは常に産業革命史をこうしたラウンドなものとして理解しよう努力しているのである。だからこそ、かれらの研究は《Economic History》ではなしに、《Economic and Social History》または《Social and Economic History》なのである。あえて一言つけ加えるならば、本書が対象とする時期に、上述したような仕方ですべての都市支配者層の交替をみなかった国々には、こうした問題意識は浮びあがってこないのではなからうか。換言すれば、産業革命から議会改革へ、という問題意識はありえても、産業革命から都市改革へ、という問題意識は欠落するのではなからうか、ということである。そうした意味あいからいうならば、本書もイギリス的な経済史研究の書だということがいえるであろう。

靴下手編工業とレース編工業の産業構造ならびにその変動過程にかんする敘述は豊富な史料に支えられており、誠に興味深いものがある。このように工業史的敘述のゆたかなことは、本書の大きなメリットであるといえよう。だが反面、商業をめぐる敘述の完全な欠如、ならびに産業（家）と都市自治体との有機的な関連追求が産業構造をめぐるそれに比して弱いということは、——ことによし悪しは別にして——ノティンガム市の《社会・経済史》ついでにラウンドな理解をふじゆうぶんなものにしており、イギリスにおけるこの種の研究としてはやや毛色の異ったものともなっているわけである。それはともかくとして、今後、都市史研究者集団のメンバーにより、この種の都市経済史研究が次々と発表され、商工業史研究と都市史研究とのあいだの間隙が埋められていくものと予想される。この点は、イギリスの各大学に提出された最近の学位請求論文リストによっても裏づけされているといえるであろう。

- (1) Roy A. Church, *Economic and Social Change in a Midland Town: Victorian Nottingham 1815-1900*, 1966, 409+xiii p.

なお同博士は、バーミンガム大学上級講師の職にある中堅の学者である。

- (2) この学会は *Economic History Society* を母体としており、会員もほとんどが重複している。なお、中川敬一郎「アイルランド経済史の動向」(『社会経済史学』33巻4号所収)66ページを参照。

- (3) 近く、『社会経済史学』誌上に発表される予定である。

- (4) W. H. Chaloner, *The Social and Economic Development of Crewe 1780-1923*, 1950.

- (5) W. K. Hunt, *The Effects of the Reform Bill of 1832 on Liverpool*, 1924, Unpublished thesis for the degree of M. A.

- (6) G. W. A. Bush, *The Old and the New: the Corporation of Bristol 1820-51*, Unpublished thesis for the degree of Ph. D.

- (7) ランカシャー綿工業におけるこうした問題については、拙稿「問屋制の終焉」（大塚久雄教授還暦記念論文集，所収）ならびに「イギリス綿工業における労働運動の二類型」（『西洋史学』76号）——いずれも近く発表される——を参照されたい。
- (8) 拙著『イギリス封建制の解体過程』244-248ページ参照。なお、靴下編工業の産業構造ならびにその構造変動にかんしては、レスターを例にとり、前掲拙著，附論においてとりあったので，ここでは詳細な紹介をさけた。
- (9) この点，綿手織工の「抵抗」組織の場合と全く同様である。前掲拙稿，「イギリス綿工業における労働運動の二類型」参照。

(1967. 10. 15)